

【講演テーマ】

# 『諦<sup>あきら</sup>めない姿 ～車いすテニスを通して感じたこと～』

【講師】

一般社団法人 日本車いすテニス協会 会長 / 株式会社 ニッツアー代表取締役  
前田 恵理 さん



【講師プロフィール】

飯塚市出身。父親が創業した LP 会社を継ぎ、地域のライフラインを守る一方、世界のトップ選手らが集う「飯塚国際車いすテニス大会(ジャパンオープン)」(NPO 法人九州車いすテニス協会主催)に 1985年の第1回から委員としてかかわり、2008 年から会長を務める。同大会の延べ 2,000 人規模の市民ボランティアによる運営は「イヅカ方式」と呼ばれ、心づくしのもてなしが高く評価されている。

【講演要旨】

## 1. 『イヅカ方式』

飯塚国際車いすテニス大会は延べ2,000人の市民ボランティアによって運営されており『イヅカ方式』と呼ばれ世界でも高い評価を受けているそうです。(※注1)

以前、日本では車いす生活になると安静第一にすることが主流だったそうです。ところが、欧米ではもう一度社会復帰するため『保護よりチャンス』という考えで、障がいがあってもとても活動的だったそうです。1985年の第1回飯塚国際車いすテニス大会から関わってこられた前田さんは、最初車いすの選手たちにどのように接すればいいか戸惑い、腫れ物に触るような気持ちがあったそうです。でも、触れ合うにしたがって選手たちの行動力に驚くようになりました。大会を開催するにあたっては、様々な困難に直面しました。「障がい者を見世物にするな」「テニスコートに傷がつく」「体育館の床に傷がつく、汚れる」「宿泊所のホテルのじゅうたんが汚れる」と言われるなど、様々なハードルが立ちはだかりました。この 30 年間、ハードルを一つひとつ乗り越えてきて今があると話されました。

(※注1)世界で、飯塚のような市民参加型の大会はほかにはない。

## 2. 印象的な言葉

講演の後半、これまでの経験などから心に残る言葉や出来事を話されました。いくつかご紹介します。

### ボランティアって何？

これは自発的に行うものであり、活動の見返りを求めず、活動する人がみな平等な立場でいること。そして選手の能力を最大限に引き出す環境を整える人。

失ったものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ

It's ability, not disability, that counts.

ルートヴィヒ・グットマン博士 (※注2)

(※注2) ポーランド(当時はドイツ)出身のユダヤ系神経学者。「パラリンピックの父」とされる。

### 3K を大切に

前田さんが思う3Kは『感心(関心)・感動・感謝』だそうです。そして様々な壁(言葉・世代・男女・宗教・肌の色・障がいなど)をなくした共生社会の実現を！…神は乗り越えられない壁は与えない。

### #We the 15

世界人口の15%、つまり12億人にあたる障がいのある人や障がいのある可能性がある人を、数として可視化することを目的とした世界的な人権運動キャンペーンとそれを示すハッシュタグ。

世の中では“健常者と障がい者”と分けた言い方をしますが、私は“目標を持っている人と目標を持っていない人”で大きく分けられると思います。

土田 和歌子さん(※注3)

(※注3) 日本の車いすアスリート。冬季(スピードスケート)、夏季(陸上)パラリンピックに合計5回出場し、金3、銀3、銅1のメダルを獲得。ほかにも多くの大会で優勝、入賞。また複数回にわたり世界記録等を樹立。

障がい者になったことを悔いてはいない。神がこれが僕にとって最高の人生だと与えてくださったんです。自分の人生が大好きだ。障がい者になって変わったことといえば、生活の中に車いすが1個増えたことかな。

イスラエル ノアム・ガーソニー選手

### 3. 終わりに

『世の中では「健常者」と「障がい者」をどうしても区別してしまう。様々な壁を取り払って障がいを個性として、一緒にスポーツを楽しみ、目標をもって生きられるような社会を目指して、車いすテニス大会を継続していきたい。』

『自分の生活の中で、どうしても見て見ぬふりをしてしまったり、できることとできないことを選んで挑戦を諦めてしまったり…そうではない生き方をしていきたい』

このように力強く話されていたのが印象的でした。

